

満舟寺

満舟寺は、将軍平清盛（1118～1181）がこの地で阿弥陀如来の名を繰り返し唱えて嵐を免れたことにちなんで創建されたといわれている。清盛はその感謝の気持ちを込めて、阿弥陀仏の発端である十一面観音像を安置した。それが後に満舟寺となった。しかし、寺伝によると、観音堂が建立されたのは清盛の死後数百年後の1718年である。その後、鐘楼、厨子（くり）、石段などが徐々に増設され、1751年（宝暦元年）には広島藩から真言宗の寺院として認可された。

境内には、俳人栗田樗堂（1749～1814）の墓碑や松尾芭蕉（1644～1694）の句碑などがある。これらは、江戸時代に御手洗の俳句文化が隆盛し、琉球王国（現沖縄県）の歌人たちとの交流があったことを物語っている。1609年に薩摩藩に侵攻された後、琉球は家臣国家となり、江戸時代を通じて徳川幕府に献上するために、優秀な学者や芸術家、歌人たちを江戸の都（現在の東京）に派遣した。その際、御手洗を訪れることもあった。このような御手洗の人々と琉球人との友好的な関係は、1806年（文化3年）に一行から満州寺に贈られた扁額（現在の観音堂に保存されている）に不朽のものとして刻まれている。

満舟寺を囲む石垣は、18世紀半ばに築かれたものである。その起源ははっきりとは記録されていないが、かつて御手洗の海岸線だった場所にあり、大小の石を組み合わせて作られたことから、その構造や立地条件から、水軍の防御のためのものであった可能性が高いと考えられている。この技法は、戦国時代の軍事建築物を作る際によく使われていたもので、乱れ築きと呼ばれている。この城壁の

由来については、1585 年の秀吉の四国征伐の際、将軍・加藤清正（1562-1611）が豊臣秀吉（1537-1598）に対抗するために築城したとする説が有力である。その規模の大きさと石の大きさをから、平成 11 年には呉市の有形文化財に指定されている。このような堀はこの地域では珍しい。